

木全ミツの グローバル随想

第9回

日本における 「女性活躍推進」



イラスト・題字：長峯亜里

戦後70年以上が経過しようとしている現在の日本の現状を考えた時に、「日本国憲法の下での男女同権」「男女雇用機会均等法」「男女共同参画」等に関して、遅いとはいえ日本の社会においても「女性活躍」の機運が高まってきていることは嬉しいことである。けれども、政府は、政治家は、企業の経営トップは、経営幹部たちは、男たちは、女たちは本気で取り組もうとしているのか。健全な社会、健全な企業経営、健全な家庭生活を維持運営していくには、この女性人財を活用してこなかった不幸な歴史に1日も早く別れを告げ、具体的な行動に着手していかねばならないのではないか。

急に「管理職に」と言われても

一部上場企業のトップ経営者たちの話に耳を傾けると、「わが社も大卒の女性を総合職で採用し、すでに10年以上の職歴をもつ女性たちが大勢いる。彼女たちに、安倍総理も言っていることだし時代も変わってきたので、そろそろ君たちも管理職に……と勧めても多くが断ってくる」「要するに、女性の人材がいないのですよ……」と。多くの企業のトップが「そうだ、そうだ。わが社も困っているのです。2020年までに管理職の30%を女性に……などと目標だけをもらっても不可能ですよ」。

何という認識？「私が彼女たちの立場であってもお断りします。その意味がお分かりになりま

すか？」と伺いたい。すなわち、大学卒の採用にあたって「わが社は男性と同様、女性も分け隔てなく採用し、待遇・昇進の面でも同等に機会を提供するのでチャレンジしてください」と言われて、その通りもし本当に、男女区別なく昇給・昇進し、社長をはじめとする経営幹部への登用の門戸が開放され、全ての機会が男性同様に与えられ、10年の職歴を重ねてきているのであるならば「喜んで管理職のオファーをお受けします」となるだろう。しかし、彼女たちは大卒の総合職で採用されても、あくまでも男性のアシスタントとして働いてきた。彼女たちの人生設計には、採用された会社の管理職になるという夢もなければ希望もなく、選択肢がない。だからこそ、自分の人生——安定した企業でそこそこの収入が保証される中で、与えられた仕事をこなしながら、自分が大切にしている生活(特技を身に付け、趣味を活かし、生涯を通して自己啓発に挑戦し、結婚生活をはじめとする充実した自分の生活をエンジョイする)——の確立という確固とした目標をもって生活しているのだ。急に「管理職に」と言われても……。また、就職して10年の間に、「会社のためなら……」と自分の個人としての生活を顧みず会社人間になって働く男性管理職の生きざまを決してよしと思っていない彼女たちには「なぜ私の人生をあんなかたちに変えなければならないの?」「私は今のままで結構です。満足しています」